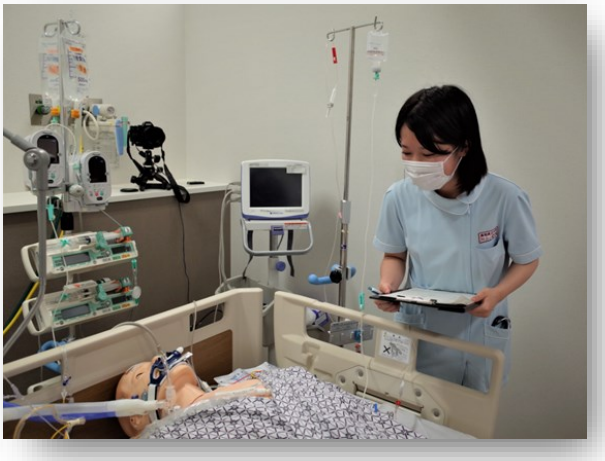
高知県立大学　看護学部　学生生活通信　2020年8月　第19号

fure-fure



高知県立大学　看護学部
Faculty of Nursing University of Kochi

看護学部の「持続可能な開発目標」への取り組みについて　藤田 佐和 先生

今年の4月から2期目の看護学部長を務めております藤田佐和と申します。大学は新型コロナ感染症拡大の影響を受け、学生さんに遠隔授業や外出自粛、様々なイベントや課外活動の中止をお願いしてきました。このような環境でも、精一杯頑張ってくれている学生さんに感謝するとともに、エネルギーをいただいています。

社会全体が危機的状況にありながらも、私たちは、歩みを止めることなく、将来を担う学生さんとともに、前進することが必要だと考えています。そこで、高知県立大学が取り組みをはじめた「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」について、少しご紹介したいと思います。SDGsは2015年9月の国連サミットで採択されました。SDGsでは、「地球上の誰一人として取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のために、2030年を年限とする17の国際目標を掲げています。SDGsは、あらゆる人々が活躍する社会の実現、健康・長寿の達成、防災・気候変動対策、平和と安全・安心社会の実現など、世界の取り組むべき課題を幅広く網羅しています。

高知県立大学では、SDGsの達成に向けて、未来ある学生さん一人一人が国際目標の達成を担うことを意識し、取り組むべき課題への考え方や知識・技術を修得し、国内外の地域に飛び立つことを応援してしています。特に、17の国際目標の3番目は、「あらゆる年齢層のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する」がテーマであり、看護にとって最も関係の深い目標です。健康な生活があるからこそ、私たちは満たされた時間やスポーツなどの余暇を楽しみ、仕事に打ち込むことができます。人々の健康は、SDGs達成の基盤となるもので、コロナ禍で私たちはこのことを強く感じているのではないでしょうか。

高知県は森林率が全国１位(84%)で、さらに高齢化・少子化が進行し、豊かな自然に恵まれている一方で健康格差が広がりやすい環境にあります。また、南海トラフ地震の影響や風水害の被害も避けて通ることができません。学生さんはこれまでも、在学中に立志社中や地域学実習、サークル活動、看護学部の取り組みを通して、地域の方々と健康について考え、人々がより良く生活するために、自分自身ができることを実践してきました。卒業後も、それぞれの暮らす地域でリスクへの備えを強化し、健康課題の解決に取り組む力を育んでいきたいと考えています。

私たちは、学生さんに「あなたの未来に関する関心はどんなことですか？」と問いかけます。そして、SDGｓとは何か、自分に何ができるかを深く考え、行動していくことを支援したいと思います。地域の方々と連携しながら、リーダシップを発揮して、人々と共に歩む健康の在り方をリードし、豊かで活力ある未来の創造を担っていく看護専門職者の育成に、教育、研究、実践活動を通して取り組んでいきたいと考えています。

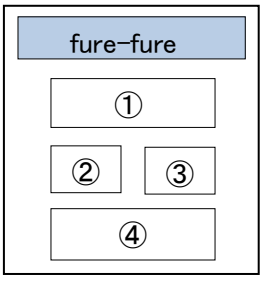
第25回日本在宅ケア学会学術集会開催　森下 安子 先生

第25回日本在宅ケア学会学術集会を2020年6月27日（土）Web上でLive配信にて開催いたしました。新型コロナウイルス感染症の感染拡大が懸念される中、参加者の皆様方の安全と健康を最優先し、プログラムを限定してWeb配信としました。今回の学術集会のテーマは、「ライフ・デザインと多職種協働～主体的選択を地域で支える仕組みづくりに向けて～」でした。社会保障制度の持続可能性が懸念される中で、少子高齢化による人口構造の変化に伴い、保健医療のニーズは増加、多様化すると予想されます。在宅ケアに従事する専門職には、人々の多様性を認め、主体的選択を地域で支える仕組みづくりが求められており、本テーマとしました。在校生の皆さんにも学術集会会場で、講演などを通して先駆的な取り組みについて聞いたり、学内の先生方の研究や学部の卒業論文の発表を通して在宅ケアについて考えていただいたりするはずでしたのでとても残念でした。

高知県は、全国に先行して人口の自然減に突入したのは1990年で、全国より15年先行しているといわれています。また少子高齢化も全国より10年先行し、高齢化率は2019年10月現在35.2%、中山間地域が県土の9割以上を占めています。学術集会では、このように少子高齢化、過疎化、人口減に伴う経済規模の縮小という課題を抱えていえる高知県において、誰もが住み慣れた地域で、自分らしく、安心して暮らし続けるために、県、大学、市町村、各専門職等が協働し創意工夫を行い展開している取り組みを紹介する企画を多く取り入れました。Web上ではありますが、質問機能を用いて皆様にも参加できる形をとり、参加者からは安心して参加できた、楽しい充実した学会であったという声をいただきました。看護学部の先生方、研究活動で大学とつながっていたIT関連企業等の皆様の多大なるご支援のもと初めてのWeb学会を無事開催することができ、改めて学内の先生方のスキルの高さとチームワークのすばらしさを実感しています。看護学部の学生さんたちにもWebで参加できるようにしました。Web学会ではありましたが、全国から546名と予想以上の参加登録があり、参加いただいた皆様、学生さんたちにとって多職種による講演や先駆的な取り組み報告を通して、看護をはじめ各職種の専門性や協働の在り方について考えるなど新たな知の創造につながる機会となっていたら幸いです。

表紙の写真

①1回生:新入生ガイダンス
②3回生:学内での演習の様子
③4回生:総合看護実習
④2回生:看護実践への誘い



各学年の大学生生活

■1回生■

通常よりも不安や緊張が高い状況での大学生活スタートとなり、遠隔授業開始時は、講義を受けることや課題の提出などに難しさを感じている学生もいましたが、疑問や不安などを教員や大学の職員に相談しながら奮闘し、主体的に取り組んでいる様子が見られました。保護者の方にも多大なるご支援をいただきながら、少しずつペースをつかみ、現在は高知での生活にも慣れてきているようです。また、週1回開催しているオンラインでのクラス会では、仲間と情報を共有したり、サークル活動やボランティアの紹介などを通して先輩ともつながりながら、活動範囲を広げる準備をしています。

6月末からは一部対面での授業も始まりました。自分自身の安全を守ることや、感染拡大を防止し、人々の安全を守るという専門職としての自覚を持ちながら、授業や演習に取り組み、これまで学んできた知識を活用して根拠をもった実践を行うことの重要性についても学びを深めています。

■2回生■

4月は学期早々から遠隔授業となり、受講や課題に一人で取り組む大変さ、難しさを体験しました。授業では、採血の練習をするためにご家族の腕を借りたり、タオルやボールペンなど家にあるものを活用したりしながら、各自工夫して勉強を継続しました。授業や生活で分からないことや不安なことを共有するために、教員のサポート体制を強化して相談できる場を作りました。教員と学生は、Open Chatやメール、電話を通して、また、同級生のネットワークなどを活用しながら、一つずつ学びを深めることができました。

6月末からは対面授業が開始され、採血の実技演習では、練習を重ねた成果を発揮しました。また、実技だけでなく、病態と疾患などの専門的知識や看護の基礎知識を活用して、患者さんの体験をイメージしながら、より安全で安楽な援助方法について考えています。

8月には、初めて入院中の患者さんを担当させていただく看護基盤実習が始まります。期待と不安が入り混じる中、6月末に感染症に関する特別講義を受け、看護者としての自覚や臨地での感染予防に対する意識を高め、実習へ備えています。

■3回生■

看護臨床科目の講義が多くなる3回生は、様々な領域の看護学について理解を深め、自分がなりたい看護者としての姿の探究に取り組んでいます。コロナ禍のなか、慣れない遠隔授業が始まり、当初は通信環境が整わずに戸惑いの声も聞かれていましたが、徐々に順応し、課題にも熱心に取り組む様子が伺えました。オンデマンド方式で講義が配信される中で、時間感覚を失わないように時間割に合わせたり、一方、アクセスが集中する時間を避けたり、などの工夫もみられました。6月下旬からは部分的に対面授業が再開となり、友人との久しぶりの再会に自然と笑顔がこぼれていました。学校生活の中でも、3密を避けることをお互いに意識した、新しい生活様式の実践が行われています。8月以降は、延期していた保健医療系就職ガイダンスや、インターンシップなどが始まります。県内で活躍する先輩の話や、働く環境での体験を通して、将来の進路を決める機会になればと思っています。

■4回生■

4回生は、遠隔授業に加え、看護研究、就職活動、国家試験受験対策など様々なことに取り組んでいます。

学生は希望する就職先の採用試験に向けて、履歴書の作成、小論文の練習などワクワクworkの就職相談員や教員のサポートを受けながら準備を進めています。今年は、新型コロナ感染症拡大に伴い就職試験の日程変更が相次ぎ、オンラインでの面接試験が取り入れられるなど、例年とは違う状況にありますが、学生は積極的に情報収集し、卒業生にも相談をしながら臨機応変に対応しています。

5月には国家試験摸試を自宅受験し、国家試験の出題範囲の広さとともに学習の必要性を再認識しました。現在、オンラインで学習会を開催し、問題の解き方や学習計画を確認しながら2月の国家試験に向けて取り組んでいます。

そして、6月下旬から総合看護実習が始まりました。今年度は病院や地域での実習受け入れが困難な状況となり、学内での実習となりましたが、一人ひとりが将来を見据え、学びたいことを明確にして主体的に臨んでいます。これまで習得してきた知識・技術を統合させ、ロールプレイやディスカッションを行いながら対象に合った看護について深く考える機会となっています。

看護学部における教育の工夫 －総合看護実習について－

【総合看護実習：感染拡大防止と学修到達目標達成を目指して】看護学部臨床実習委員長　大川宣容　先生

4回生で履修する総合看護実習は、共通教養教育科目、専門基礎科目、看護基礎科目、看護臨床科目を通して学修した内容を統合し、専門性を深める科目です。3年次までに修得してきた看護実践能力を発揮して、臨地で期待される看護実践を目指して段階的に学修します。

新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、総合看護実習も学内で行うことを4月に決定しました。「学内で学生はどのように学べるだろうか？」と実習を担当する教員が試行錯誤しながら、総合看護実習の到達目標の学修ができるように組み立てました。制限緩和の第一段階にスタートする実習であることから、感染防止行動を徹底しながら、学生自身が主体的にビジョンを持ちながら学べるように工夫しました。いつでも繰り返し学べるオンライン教育の良さと対面で学習することの良さを組み合わせたハイブリッド型とし、臨床をイメージできる事例を活用すること、現場の看護師や保健師からの講義を組み合わせて、視野の広がりがもてるような組み立てとなりました。

学生からは、「いつもの実習では目の前のことに対応することに精一杯だったけれど、じっくり考えることができたのはよかった」「グループで複数の事例について検討することで深まった」「苦手だったことを整理することができた」などの感想がありました。担当した教員からは、「丁寧に事例に取り組めたし、実習目標に挙げていることをしっかりと学べていた」「臨床の看護師さんの話を聴くことで臨床をイメージする機会になった」などの感想がありました。しかし、「経験がないことをイメージすることには限界がある」という教員の声や、「やっぱり臨床で、患者さんとかかわりたかった」という学生たちの声があったことも事実です。

今後も大学のコロナウイルス感染症対応ガイドラインに沿って、リスクレベルに応じた臨床実習の方法を検討し、安全を守りながら、学修機会を確保していきたいと考えています。

学生の活動

【イケあい地域災害学生ボランティアセンターについて】　3回生　遠藤春音さん　江本美月さん

“イケあい”とは、イケあい地域災害学生ボランティアセンターの略称で、災害時に学生ボランティアセンターを立ち上げ、学生ボランティアのコーディネートを行うことを目的とした学生グループです。①地域住民との信頼関係づくり、②学生の防災意識向上、③ボランティアセンター運営のノウハウの向上、④他大学との連携を目標に掲げ、日々活動しています。

主な活動は、地域での運動会などの行事参加、炊き出し・手浴・イラストを使った避難所配置ゲームによる防災啓発、未災地ツアーによる地域防災力の向上促進などがあります。イラストを使った避難所配置ゲームとは、小中学生でもイメージしやすいイラストを使って自分の学校が避難所になったことを想定し、人員や物品の配置、様々な事例対応を話し合い、考え判断するためのゲームです。このゲームを行うことで災害時の対応能力、日々の防災への意識を高めることにつながります。また未災地ツアーとは、街歩きを通して災害危険個所をチェックし、避難経路を確認することで、発災時に命を守る避難行動を学ぶことを目的としています。未災地とは未来に被災する土地のことで、将来必ず起こる南海トラフ地震に備える高知市は防災課題を通じて発災時に命を守る避難運動を学ぶことが必要です。

皆で作成した手作り防護服

現在、新型コロナウイルス感染症の影響により、サークル活動は難しい状況にあります。しかし、このコロナ禍でもできる活動はないかと部員で話し合い、手作り防護服を福祉施設や介護施設に届けるプロジェクトへの参加を決定しました。現在、部員一人一人が動画を見ながら防護服を作成し、コロナウイルス予防に役立つよう活動しています。

今年度に入ってから、新入部員を迎えられておらず、部員同士も会って活動できていない状態ですが、こんな状況だからこそイケあいができる活動を考え、積極的に他のボランティア団体や他大学と連携を取り合って、すこしでも地域の力になれればと思っています。

〔ニュースレターの名前の意味〕fure-fure　学生さんを応援する気持ちを込めて、学生さんが、誰かを応援できるようになる願いを込めて、この名前を付けました。

ご意見、ご感想など、お寄せ下さい。　fure-fure-kango@cc.u-kochi.ac.jp